

源氏物語宿木後半評釈（1）

田村俊介

富山大学人文学部紀要第70号抜刷  
2019年2月

源氏物語宿木後半評釈（1）

田村俊介

## 評釈篇

## 凡例

◎ 会話文には、鍵括弧（「」）を付けた。その会話文の中の会話文は、二重鍵括弧（『』）を付けた。心内文も鍵括弧を付けることもある。その、二重鍵括弧で括った部分に、会話文がある場合、三角括弧（〈〉）で括った。

◎ 『源氏物語』の用例、文章を引用する場合、原則として、次のような方針を立てている。

まず、総角巻、宿木巻については私の釈文を引用する。

尾州家本古写の巻々のうち、『古典の批判的処置に関する研究』第二部二九一頁でいう「合成」の巻々（総角、宿木を除くと全部で八帖）については、青表紙本の主として古代学協会蔵本（通称大島本）を底本とした新全集で引用した後、尾州家本見七消チ補入前本文も書き添える。

尾州家本古写の巻々のうち、『古典の批判的処置に関する研究』第二部二九一～二九二頁でいう「混成」の巻々、及び尾州家本補写の巻々については、新全集で引用する。

◎ 本拙稿評釈篇の【注】の欄、【鑑賞】の欄を作成するに当たっては、比較的新しい次の六種の校注書を用いた。

□ 集成（宿木巻を収める第七巻は、昭和五十八年発行）

□ 新全集（宿木巻を収める第五分冊は平成九年発行）

□ 『源氏物語の鑑賞と基礎知識 宿木（前半）』（至文堂、平成一七年発行）

なお、□の略称として、「鑑賞と基礎知識前半」という呼び名を使うことにした。

□ 『源氏物語の鑑賞と基礎知識 宿木（後半）』（至文堂、平成一七年発行）

なお、□の略称として、「鑑賞と基礎知識後半」という呼び名を使うことにした。

□ インターネットの渋谷栄一氏のサイト「源氏物語の世界」

渋谷氏のサイトは各巻ごとに、「本文」、「ローマ字版」、「現代語訳」、「注釈」、「翻刻資料（架蔵本）」、「翻刻資料（大島本）」（巻によっては「翻刻資料（定家自筆本）」や「翻刻資料（明融臨模本）」が加わることもある）、「自筆本奥入」が掲載されているが、私が参照したのは「49 宿木」の「注釈」の部分である。序文に当たる【ご利用の皆様へ】の日付は二〇〇二年一月二日、【ご利用の皆様へ】の追加の日付は二〇〇二年八月七日。以上、二〇一二年八月にアクセスした上での情報である。私がプリントアウトしたのは、二〇一五年四月三日である。その後、このサイトに「注釈」の部分が残っているかは不明である。あくまで、二〇一五年四月三日にプリントアウトした紙に基づいている。

なお、**四**の略称として、「世界」という呼び名を使うことにした。

**四** 『源氏物語注釈十』（風間書房、平成二六年）

なお、**四**の略称として、「注釈」という呼び名を使うことにした。前拙稿「源氏物語総角前半評釈（1）」を提出した後、総角巻を含む『源氏物語注釈』第九巻が発行された（平成二四年一〇月）ため、総角巻の評釈を書く際には参照しなかった。本拙稿の「注釈」という言葉も、特に断らない限り、宿木巻を含む『源氏物語注釈』第十巻を指す。

【注】で引用する際、例えば、

集成では、○○○○○のように述べられている。

という形で記すことも、

○○○○○《集成》

という形で記すこともある。

又、これらの諸注釈書の文言を全くそのまま引用する場合も、少し表現を変えて引用する場合も、

○○○○○《集成》

という形で記すことにする。

複数の注釈書で同じ趣旨の注がある場合も一つの注釈書名のみ記すこともあった。その場合、発行年の早い注釈書を優先した。

◎ 「源氏物語宿木後半評釈（1）」の範囲は、宿木巻（三三三）から（四二）である（段落分けは、私に拠る）。

◎ その他の点に就いては、『富山大学人文学部紀要』第六五号（二〇一六年）所収拙稿「源氏物語宿木前半評釈（1）」の評釈篇の凡例を参照されたい。

〔三三三〕 薫、弁の尼に浮舟仲介を頼む。

さて、ものついでに、かの形代<sup>かたしろ</sup>のことを言ひ出で給へり。（弁の尼）「京に、この頃侍らむとはえ知り侍らず。人伝<sup>づ</sup>てに承りしことの筋ななり。故宮<sup>こきう</sup>の、まだかかる山里住みもし給はず、故北<sup>こほく</sup>の方の亡<sup>う</sup>せ給へりける。程近かりける頃、中将の君とてさぶらひける上臈<sup>じやうらふ</sup>の、心ばせなどもけしうはあらざりけるを、いと忍びてはかなきほどにも宣はせけるを、知る人も侍らざりけるに、女子<sup>むすめ</sup>をなん産<sup>う</sup>みて侍りけるを、さもやあらむと思すことありけるからに、あいなくわづらはしくものしきやうに思しなりて、またとも御覧じ入ることなかりけり。あいなくそのことに思し懲<sup>こ</sup>りて、やがておほかた聖<sup>ひじり</sup>に成らせ給「たまひ」にけるを、はしたなく思ひてえさぶらはずなりにけるが、陸奥<sup>みちのくに</sup>の守<sup>かみ</sup>の妻<sup>め</sup>になりけるを、一年、上りて、その君たひらかにもし給「たまふ」よし、この辺<sup>わた</sup>りにもほのめかし申「まうし」たりけるを聞こし召しつけて、（八の宮）『さらにかかる消息<sup>せうし</sup>あるべきことにもあらず』と宣はせ放ちければ、かひなくてなん嘆き侍りける。さて、また、常陸<sup>ひたち</sup>に成りて下り侍りければ、この年頃<sup>としごころ</sup>音<sup>おと</sup>にも聞こえ給はざりつるが、この春、上<sup>のぼ</sup>りて、かの宮には尋ね参りたりける。となん、ほのかに聞き侍りし。かの君の年は、二十<sup>はた</sup>ばかりには成り給ひぬらむかし。『いとうつくしう生<sup>お</sup>ひ出で給「たまふ」がかなしき』などこそ、中頃<sup>なかつら</sup>は、文<sup>ふみ</sup>にさへ書き続けて侍<sup>ま</sup>りしか」と聞こゆ。

くはしく聞きあきらめ給ひて、（薫）「さらば、まことにてもあらむかし、見ばや」と思ふ心出<sup>い</sup>で来<sup>き</sup>ぬ。（薫）「昔の御けはひに、かけても触れたらむ人は、知らぬ国までも尋ね知らまほしき心あるを、数まへ給はざりけれど、け近き人にこそはあなれ。わざとはなくとも、この辺<sup>わた</sup>りにおとなふ折あらむついでに、かくなん言ひしと伝へ給へ」などばかり宣ひ置く。（弁の尼）「母君<sup>はは</sup>は、故北<sup>こほく</sup>の方の御姪<sup>めひ</sup>なり。弁も離れぬ仲らひに侍「はべる」べきを、その昔<sup>かみ</sup>はほかほかに侍りて、くはしくも見給へ馴<sup>な</sup>れざりき。先<sup>ま</sup>つ頃、京より、

大輔「たいふが」もとより申「まうし」たりしは、『かの君なん、(浮舟)へいかでかの<sup>10</sup>御墓にだに参らむと宣ふなる、さる心せよ」など侍りしかど、まだ、ここにさしはへてはおとなはず侍り。いまさらに、さやのついでに、かかる仰せなど伝へ侍らむ」と聞こゆ。

## 注

- 1 原本は「うせ給はりし」。「う」の下の「せ」を「け」に校訂した。
- 2 亡き八の宮《集成》
- 3 原本は「うけ給へりける」。「う」の下の「け」を「せ」に校訂した。青表紙本系古代学協会蔵本も「うせ給へりける」(八十二丁ウ六〇七行目)。
- 4 「聖」とは、ここでは、女性のことを全く考えない男性、という意味。「なごりなき御聖心の深くなりゆくにつけても」(「幻」(二))。
- 5 二条院に参上して中の君の許にお伺いした《鑑賞と基礎知識後半》。
- 6 亡き大君に似た人であるなら。《新全集》
- 7 浮舟の母、中将の君。《新全集》
- 8 原本は「こきたの」。下に「方の」を補う。青表紙本系古代学協会蔵本も「故北の方の」(八十四丁オ九行目)。
- 9 弁は故北の方の従姉妹。《新全集》
- 10 八の宮の《集成》

## 【鑑賞】

この段落から、薫の強い興味が浮舟へ向けられて行く。

浮舟は、宇治十帖執筆開始の時点で、作者の構想になかったことは、森岡常夫氏『源氏物語の研究』(弘文堂、昭和二三年) 四四―四五頁で指摘され、以後定説に成って行く。半分以上は明らかに短いが、浮舟中心に繰り広げられるこの段落以降を宿木巻後「半」とする理由の一つである。

〔三四〕 薫、弁の尼と唱和。

明けぬれば帰り給はむとて、昨夜後れて持て参れる絹、綿などやうのもの、阿闍梨に贈らせ給「たまふ」。尼君にも賜ふ。法師ばら、

尼君あまぎみの下衆げすどもの料れうにとて、布ぬいなどいふ物をさへ召たして賜たまふ。心細こころこまき住すまひなれど、かかる御ごとぶらひたゆまざりければ、身のほどにはいとめやすく、しめやかにてなん行ゆひける。木枯こがらしの耐たへがたきまで吹きとほしたるに、残こぼる梢こずえもなく散ちり敷しきたる紅葉もみぢを踏ふみ分わかける跡あとも見えぬ<sup>2</sup>を見渡みわたして、とみにもえ出でてたまはず。いとけしきある深山みやま木ぎにやどりたる鶯うづらの色いろぞまだ残こぼりたる。「こだに<sup>3</sup>」などすこし引き取とらせ給たまひて、宮みやへと思おもしくて<sup>4</sup>、持もたせ給たまふ。

やどり木と思おもひ出でずは木このとの旅たび寝ねもいかにさびしからまし<sup>5</sup>。

と独ひとりりごち給たまふを聞ききて、尼君、

荒あれ果はつる朽木くちぎのものをやどり木と思おもひ置おきける程ほどの悲かなしさ。

あくまで古ふるめきたれど、ゆゑなくはあらぬをぞいささかの慰なぐさめには思おもしける。

## 注

- 1 現在の冬のイメージとは異なり、秋の初めから冬までと、その吹く季節は広い。《鑑賞と基礎知識後半の鑑賞欄「木枯」》。
- 2 「秋はきぬ紅葉もみぢは屋戸やどにふりしきぬ道みちふみわけてとふ人はなし」（『古今和歌集・秋歌下二八七・読人しらず』）による措辞。《集成》「伊勢物語」や「源氏物語」では、来訪する人がない家を、雪や紅葉を「踏み分わかく」人、若しくは「踏みあく」人が自分以外にはない、という措辞で言い表す。「忘れては夢かと思おもふおもひきや雪ゆきふみわけて君を見むとは」（『伊勢物語』第八十五段）。「庭の紅葉こそ踏み分けたる跡もなけれ」（「帯木」〔九〕）。「踏ふみあけたる跡もなく、はるばると荒れわたりて、いみじうさびしげなるに」（「末摘花」〔二三〕）《「帯木」の例については、注釈も挙げています》
- 3 「これだに」の意味で、せめてこれだけでも、とも解せる。《鑑賞と基礎知識後半》
- 4 中の君へのお土産のお積りらしく。《集成》
- 5 前にここに泊ったことがあると思おもい出でさなかつたなら、この深山みやま木ぎのとの旅たび寝ねもどんなにさびしかったことであろう。「宿木やどぎ」（ここは前文にあるように鶯うづらのこと）に「宿やどりき」を掛ける。卷名出所の歌《集成》
- 6 薫が「やどり木」と言った宇治の邸は、実際には荒廃しきつた「荒れはつる朽木」にほかならぬとした。前歌に対して注解的な機能をさへもった詠歌。「朽ち木」も歌語《新全集》。荒れはつた朽木のような尼の住すまいを、昔の宿と覚えてくださっているお心のほど悲かなしゅうございます《新全集下段訳》

【鑑賞】

薫は、中の君へ贈るつもりで、「いとけしきある深山木にやどりたる鶯」を手に取った。このように、紅葉を男性が女性に贈るのは、光源氏が藤壺に贈るといふ賢木巻の例がある。人目を忍ぶ恋には、花よりも、紅葉という比較的目立たぬ贈り物のほうが望ましいといふことであろう。

紅葉を贈られた藤壺は、「なほかかる心の絶えたまはぬこそ、いと疎ましけれ、あたら、思ひやり深うものしたまふ人」「光源氏」の、ゆくりなく、かうやうなることをりをりませたまふを、人「女房達」もあやしと見るらむかし、と心づきなく思されて」「賢木」(二三)と、贈り主に対して、嫌悪感を抱いている。「疎まし」、「心づきな」(し)などは嫌悪感の中でも最も強いものである。桐壺院が亡くなった後なら、光源氏との恋愛も世間は或る程度許容するようにも思えるが、桐壺帝の御時、二人は不倫の關係を持ったのであり、桐壺院死後に二人の關係が明るみに出れば、生前から始まっていたのかどうかに注目が集まるはずであり、いったん、疑いを持たれてしまえば、光源氏とよく似ている冷泉東宮の顔と、その年齢が秘密を明らかにすることに成るに違いない。露骨な求愛は、この上なく迷惑だったに違いなく、藤壺はこの直後に、出家している(「賢木」(二七))。

次の段落で、中の君は「むつかしきこともこそ」と、やはり、贈り物を迷惑に思っている。

(三五) 薫、中の君に紅葉を贈呈。

宮に紅葉奉れ給へれば、男宮<sup>1</sup>おはしましける程なりけり。「南の宮<sup>2</sup>より」とて、何心なく持て参りたるを、女君、(中の君)「例のむつかしきこともこそ」と苦しく思せど、とり隠さむやは。宮、(匂宮)「をかしき鶯かな」と、ただならず宣ひて、召し寄せて見給ふ。御文には、

日頃、何とかおはしますすらむ。山里にものし侍りて、いとど峰の朝霧にまどひはべりつる、御物語もみづからなん<sup>3</sup>。かしこの寢殿、堂になすべきこと、阿闍梨に言ひつけ侍りにき。御ゆるし侍りてこそは、外に移すこともものし侍らぬ。弁の尻にさるべき仰せ言はつかはせ。



などぞある。(匂宮)「よくもつれなく書き給へる文かな。まろありとぞ聞きつらむ」と宣ふも、すこしは、げに、さやありつらむ。女君は、事なきを嬉しと思ひ給ふに、あながちにかく宣ふをわりなし<sup>4</sup>と思して、うち怨<sup>えん</sup>じてる給へる御様、よろづの罪許しつべくをかし。(匂宮)「返り事書き給へ。見じや」とて、外<sup>ほか</sup>ざまに向き給へり。あまえて書かざらむもあやしければ<sup>5</sup>、山里の御歩<sup>あゆ</sup>きのうらやましくも侍るかな。かしこは、げに、さやにてこそよくよくと思ひ給へしを。ことさらに、また、巖<sup>いはま</sup>の中求めむよりは、荒らし果つまじく思ひ侍るを、いかにもさるべきさまになさせ給はば、おろかならずなん。と聞こえ給ふ。(匂宮)「かく憎き気色<sup>けしき</sup>もなき御睦<sup>むつ</sup>びなめり」と見給「たまひ」ながら、わが御心ならひ<sup>6</sup>に、ただならじと思すが安からぬなるべし。

## 注

- 1 匂宮。《集成》
- 2 薫の邸、三条の宮。《集成》
- 3 いつもにもまして峰の朝霧の深さに晴れぬ悲しみの数々を味わい尽くしましたお話も、いずれお目にかかりまして申し上げましょう。「雁<sup>かり</sup>のくる峰の朝霧はれずのみ思ひ尽させぬ世の中の憂さ」(古今和歌集・雑歌下・九三五・読人しらず)に拠る措辞。《集成》
- 4 無茶だ、の意。「総角」〔四〕の「わりなきやうなるも心苦しくて、」の「わりなき」について、「無理矢理……をする、という際に使われる形容詞」と注した(拙稿「源氏物語総角前半評釈(2)」)。「富山大学人文学部紀要」第五九号(二〇一三年)所収。
- 5 匂宮の前で返事を書かないのも、かえって、匂宮にあやしまれてしまうから。鑑賞と基礎知識後半にも、「返事を出さないも逆に匂宮に誤解を与えてしまうという考え」とある。
- 6 自分の常日頃の性格を基準にして、他の人もそうだろうと思ひ込むときに使われる言葉。「衛門督、わがあやしき心ならひにや、この君【夕霧】の、いとさしも親しからぬ継母<sup>まはは</sup>の御事にいたく心しめたまへるかな、と目をとどむ。(「若菜下」(二九))。

## 【鑑賞】

中の君への薫の文が懸想めいたものでなかったのは、自分が中の君と一緒にいるからだろう、というのは、匂宮の思い込みに過ぎな

い。薫は、本当に懸想をする時にも婉曲な、遠慮がちな書きぶりであると想像されるからである。

しかし、語り手は、「すこしは、げに、さやありつらむ」と述べている。この、「すこし」に、疑われても仕方がない薫の振る舞いが言い表されている。

〔三六〕 中の君、菊を見て琴を弾く。

枯れ枯れなる前裁せんざいの中に、尾花おぼなの、物よりことにて、手をさし出でて招く<sup>1</sup>がをかしく見ゆるに、まだ穂に出でさしたるも、露を  
つらぬきとむる玉の緒を、はかなげにうちなびきたるなど、例のことなれど、夕風なほあはれなるころなりかし。

(匂宮) 穂に出でぬもの思ふらししのすすき招くたもの露しげくして<sup>2</sup>

なつかしきほどの御衣ぞどもに、直衣なほしばかり<sup>3</sup>着給ひて、琵琶びばを弾きぬ給へり。黄鐘調わうしきやうの搔き合はせを、いとあはれに弾きなし給へば、  
女君も心に入り給へることにて、もの怨えんじもえし果て給はず、小さき御几帳みちやうのつまより、脇息けふそくに寄りかかりてほのかにさし出で給へる、  
いと見まほしくらうたげなり。

(中の君) 「秋果つる野辺の気色もしのすすきほのめく風につけてこそ知れ<sup>4</sup>

わが身一つの<sup>5</sup>」とて涙ぐまるるが、さすがに恥づかしければ、扇あふぎを紛らはしておはする心うちの中も、らうたく推しはからるれど、(匂  
宮) 「かかるにこそ人もえ思ひ放たざらめ」と疑はしき方たならで恨めしき<sup>7</sup>なめり。

菊の、まだよくもうつろひ果てて、わざとつくるひたてさせ給へるは、なかなかおそきに、いかなる一本ひともとにかあらむ、いと見どころ  
ありてうつろひたるを、とりわきて折らせ給ひて、(匂宮) 「花の中に偏ひととに」<sup>8</sup>と誦ずじ給ひて、(匂宮) 「なにがしの皇子みこの、この花め  
でたる夕ぞかし、いにしへ天人の翔りて、琵琶びばの手を調べけるは。何事も浅くなりたる世はもの憂しや」とて、御琴ごこさし置き給  
ふを、口惜しと思して、(中の君) 「心こそ浅くもあらめ、昔を伝へたらむことさへは、などてかさしも」とて、おぼつかなき手などを  
ゆかしげに思したれば、(匂宮) 「さらば、ひとりごとはさうさうしきに、さし答へし給へかし」とて、人召して、箏さうの御琴ごことり寄せさ  
せて、弾ひかせ奉り給へど、(中の君) 「昔こそまねぶ人もものし給ひしか、はかばかしく弾きもとめずなりにしものを」とつつましげに

て手も触れ給はねば、(匂宮)「かばかりのことも、隔て給へるこそ心憂けれ。この頃見る辺り<sup>10</sup>は、まだいと心とくべきほどにもならねど、片なりなる初<sup>11</sup>ごとをも隠さずこそあれ。(薫)『すべて、女は、やはらかに心うつくしきなん良きこと』とこそ、その中納言も定む<sup>11</sup>めりしか<sup>12</sup>。かの君に、はた、かくもつつみ給はじ。こよなき御仲なめれば<sup>13</sup>』など、まめやかに恨みられて<sup>14</sup>ぞ、うち嘆きてすこし調べ給ふ。ゆるびたりければ、盤渉調に合はせ給ふ。搔き合はせなど、爪音をかしげに聞こゆ。伊勢の海うたひ給ふ御声のあてにをかしきを、女ばらも物の背後に近づき参りて、笑みひろこりてゐたり。(女房)「二心おはしますはつらけれど、それもことわりなれば、なほわが御前をば幸ひ人<sup>15</sup>とこそは申さめ。かかる御ありさまにまじらひ給ふべくもあらざりし所の御住まひを、また帰りなまほしげに思して、宣はするこそいと心憂けれ」など、ただ言ひに言へば<sup>16</sup>、若き人々は、「あなかまや」など制す。

## 注

- 1 「尾花」は穂(花)の出た薄。穂のなびく様子を、手を振って人を招く動作に見立てる。和歌固有の擬人法。次の匂宮の和歌も同じ表現法。《新全集》「この家の垣ほより、いとめでたく色清らなる尾花、折れ返り招く。前に立ちたまへる人、(兵衛佐)「あやしく招くところかな」とて、／ 吹く風の招くなるべし花すすきわが呼ぶ人の袖と見つるは／とて渡りたまふ。若小君(＝藤原兼雅)、／ 見る人の招くなるらむ花すすきわが袖ぞとはいはぬものから／とて、立ち寄りたまひて折りたまふに、この女(＝俊蔭女)の見ゆ(「うつほ物語」「俊蔭」(二七))。
- 2 表には現さない何か悩みでもおありのようですね、露にうちしおれて人恋しげなすすきの風情さながらですよ。薫のことを諷する。《集成》
- 3 底本は、「なつかしきかりき給て」。青表紙本系古代学協会蔵本が「なつかしきほどの御そともになおしハかりき給て」とある(八十七ウ八、一〇行目)とあるのを参照して、「ほどの御そともは、なほしは」を補った。
- 4 もう私がすっかり嫌いにおなりになったあなた様のお気持は、それとないそぶりでも私には分ります。「秋果つる」に「飽き果つる」を掛ける。《集成》
- 5 「おほかたの我が身一つのうちきからになべての世をも怨つるかな」(「拾遺集」・恋五・九五三・貫之)。わが身の不仕合せから、秋の哀れもひとしお身に沁みます、というほどの気持であろう。《集成》
- 6 底本は「こ、ろこ、ろ」。二つ目の「こ、ろ」を衍字と見做し、削除した。
- 7 中の君が魅力的だから、恐らく他の男との密通の機会も増えるのではないか、という発想は、「二五」にも見られた。「うち泣き給へる気色の、限りなくあはれなるを見るにも、(匂宮)「かかればぞかし」といとど心やましくて、」……愛敬づきらうたきところなどの、なほ人には多くまさりて思さるるままには、(匂宮)「これをはらからなどにはあらぬ人のけ近く言ひ通ひて、事にふれつつ、おのづから声、けはひをも聞き見馴れむは、

いかでかただにも思はむ。かならずしかおほえぬべきことなるを」とわがいと隈なき御心ならひに思し知らるれば、心をかけて、(句宮)「しるきさまなる文などやある」と、近き御厨子、小唐櫃などやうの物をも、さりげなくて探し給へど、さる物もなし。……(句宮)「あやし。なほ、いとかうのみはあらじかし」と疑はるるに、

8 「是れ花の中に偏に菊を愛するにはあらず／此の花開けて後更に花無ければなり」(和漢朗詠集・上・菊・二六七・元稹)《集成》

9 新全集は、「源高明(醍醐天皇第五皇子)の庭の木に廉承武の霊が降りて、小児の口をありて前注の詩「是れ花の中に偏に……」を詠じ、作者元稹の本意は「開ケテ後」ではなく「開ケ尽キテ」であったとし、さらに琵琶の秘曲を授けたとする故事。『源氏釈』『紫明抄』『河海抄』などに注されるこの伝承は、『江談抄』『十訓抄』『古今著聞集』などにも類話が見える」と注するが、句宮は、「開ケテ後」ではなく「開ケ尽キテ」であるということには言及していないし、天人の名に値するかどうか不明であるので、出典不明としておきたい。

10 六の君のこと。《集成》

11 藤袴巻末に、「定む」の用例がある。「女の御心はへは、この君「玉鬘」をなん本にすべきと、大臣たち定めきこえたまひけりとや」。この「定め」と同じく、評定する、の意であろう。

12 「すべて、女は、やはらかに心うつくしきなん良きこと」については、光源氏が紫上に言った詞の中に、似たものがある。「(源氏)「……」。女は、心やはらかなるなむよき」など今より教へきこえたまふ」(若紫「二二三」)。光源氏は、戸籍上の息子である薫に、こうした教えを伝授したのである。

13 薫との仲を推量するいやみでしめくくる。《新全集》。

14 この「恨(む)」に就いても、「宿木」四鑑賞欄参照。(拙稿「源氏物語宿木前半評釈(1)」)。「富山大学人文学部紀要」六五号。二〇一六年。ここでも、連用修飾語は、「まめやかに」である。

15 低い身分なのに、思いがけず高貴な人と結婚して重んじられる、幸運な女性をいう。黄鐘調と盤渉調の調べが相和し、二人の仲睦まじい様子を見た、女房の感嘆の声である。物語中、幸い人と取り沙汰された女性は、明石の君二例、中の君二例、紫の上一例である《注釈》

16 動詞の連用形プラス「に」プラス同じ動詞、という語法は、そのことが滞りなく行われることを示す。「蟻はいとにくけれど、かろびいみじうて、水の上などをただ歩みに歩みありくこそをかしけれ」(枕草子「四」)。

## 【鑑賞】

新全集は、「盤渉調」の注として、「箏を盤渉調(帯木180ページ注二八)にととのえた」と、雨夜の品定めの一場面に注意を喚起している。今、その場面を引用しよう。

菊いとおもしろくうつろひわたりて、風に競<sup>ま</sup>へる紅葉<sup>もみぢ</sup>の乱れなど、あはれとげに見えたり。「女は」また箏<sup>そう</sup>の琴<sup>こと</sup>を盤渉調<sup>ばんじやうてう</sup>に調べて、いまめかしく掻<sup>ひ</sup>いたる爪音<sup>つまね</sup>、かどなきにはあらねど、「帚木」(九)

趣深く色変わりした菊を背景に、やや高い音である盤渉調で演奏されている。

この段落の後半でも、色変わりした菊を背景に、中の君が盤渉調で演奏している。前半では、尾花が目立った。菊が描写される後半で初めて、盤渉調の演奏が始まるのである。菊と盤渉調との取り合わせを愛でる美意識があつたのではなからうか。

〔三七〕 夕霧、匂宮を連れ去る。

御琴<sup>ごこと</sup>ども教へ奉りなどして、三、四日籠<sup>こも</sup>りおはして、御物忌<sup>ものいみ</sup>などことつけ給ふを、かの殿には恨めしく思して、大臣<sup>おとど</sup>、内裏<sup>うち</sup>より出で給ひけるままにここに参り給へれば、宮、「ことごとしげなるさまして、何しにいましつるぞとよ」とむつかり給へど、あなたに渡り給ひて対面<sup>たいめん</sup>し給ふ。(夕霧)「ことなることなきほどは、この院を見で久しうなり侍るもあはれにこそ」など、昔の御物語どもすし聞こえ給ひて、やがて引き連れ聞こえ給ひて出で給ひぬ。御子どもの殿ばら、さらぬ上達部、殿上人などもいと多く引き続き給へる、勢ひこちたきを見るに、並ぶべくもあらぬぞ屈<sup>く</sup>しいたかりける。人々のぞきて見奉りて、(女房)「さも、きよらにおはしける大臣<sup>おとど</sup>かな。さばかり、いづれともなく若く盛りにて、きよげにおはさうずる御子どもの、似給ふべきもなかりけり。あなめでたや」と言ふもあり。また、(女房)「さばかりやむことなげなる御さまにて、わざと迎へに参り給へるこそ憎けれ。やすげなの世の中や」など、うち嘆くもあるべし。御みづからも、来<sup>き</sup>し方<sup>かた</sup>を思「おもひ」出づるよりははじめ、かのはなやかなる御仲らひに立ちまじるべくもあらず、かすかなる身のおぼえをといよいよ心細ければ、(中の君)「なほ心やすく籠<sup>こも</sup>りゐなんのみこそ目やすからめ」など、いとどおぼえ給ふはかなくて年も暮れぬ。

## 注

1 父・光源氏の思い出が残っている、この二条院は、しばらく見ないでいると、なつかしくなる、だから来た、という趣旨の夕霧の詞。鑑賞と基

礎知識後半鑑賞欄「夕霧と二条院」にも、「夕霧にとつてこの場所は思い出深い場所であつたらう」とある。勿論、これは、ここに来た口実である。真の狙いは、大勢の子供を引き連れてここに来て、その帰りに句宮を連れ去らう、ということにある。

- 2 「おはさうず」は、元の語構成の要素である「あふ」の意味を保持していて、主語は複数となる。《鑑賞と基礎知識鑑賞欄「おはさうずる」》  
3 この詞は、「きよらなり」が「きよげなり」より一段高い美を示す、と考える際の格好の根拠になる。

### 【鑑賞】

「心細し」は「心細い」と訳されることが多く、それはそれでいいのだが、現代語の「心細い」が漠然とした不安を表すことが多いのに対し、もっと切実な、目の前に迫つた不安である。

○今年こそなりはひにも頼むところすくなく、田舎の通ひも思ひかけねば、いと心細けれ。(「夕顔」(一一〇))  
次の例は、「あつし」(＝病気がち)と共に使われているが、命に関わるような病気を読者に連想させているのである。

○いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを(「桐壺」(一一))  
そのため、親がない娘にも、頼用される。

- 親もなく、いと心細げにて、さらばこの人こそはと事にふれて思へるさまもらうたげなりき。(「帚木」(一一〇))  
○故常陸の親王の末にまうけていみじうかなしうかじづきたまひし御むすめ、心細くて残りゐたるを、(「末摘花」(一一))  
○とりわきてらうたくしたまひし小さき童の、親どももなくいと心細げに思へる、ことわりに見たまひて、(「葵」(一一二))  
○「自分、即ち中の君と大君は」幼き程より、心細くあはれなる身どもにて(「宿木」(一一三))  
また、切実な不安である以上、やはり、もうすぐ死ぬに違いないというときにも頼用される。

- 「朱雀帝は、」おほかた世にえ長くあるまじう、心細きこと(「濡標」(一一))  
○「六条御息所は」にはかに重くわづらひたまひて、ものいと心細く思されければ、(「濡標」(一一二))  
○朱雀院の帝、ありし御幸の後、そのころほひより、例ならずなやみわたらせたまふ。もとよりあつしくおはします中に、このた  
びはもの心細く思しめされて、(「若菜上」(一一))

○我「自分、即ち女三宮」も、今日か明日かの心地しても心細ければ、「柏木」(二)

興味深いのは、匂宮の心理をいう場合、女性を失ったとき、或いは、失いそうなとき、「心細し」が使われることである。匂宮にとって、そのときに恋をしている女性を失うのは、大袈裟でなく、死ぬ程の悲しみなのであろう。実際、病気になることもあった。

○おとろ／＼しき心ちにもはへらぬをみな人はつ、しむへきやまひのさまなりとのみものすれはうちにも宮にもおほしさわくかいとくるしくけに世中のつねなきをも心ほそく思はへる（「蜻蛉」十四丁オ）

新全集では、

おどろおどろしき心地にもはべらぬを、皆人は、つつしむべき病のさまなりとのみものすれば、内裏にも宮にも思し騒ぐがいと苦しく、げに世の中の常なきをも、心細く思ひはべる（「五」）

○かうおほしいらるれとおはします事はわりなしかうのみものを思は、さらにえながらふましき身なめりと心ほそさをそへてなけき給（「浮舟」二十六丁オ）

新全集では、

かう思し焦らるれど、おはしますことはいとわりなし。かうのみものを思はば、さらにえながらふまじき身なめりと心細さを添へて嘆きたまふ。（「二五」）

この段落の「心細し」は、中の君の心理を言ったものであるが、次段落以降、出産、しかも男児出産が語られることとなる。次の帝の有力候補の匂宮の男児を出産し、地位が安定したあとの中の君の描写に於いては、たとえ「心細し」が使われていても、

○世中のうらめしく心ほそきおりくも又かくなからふれはすこしもおもひなくさめつへきおりもあるを（「東屋」二十二丁オ）  
新全集では、

世の中の恨めしく心細きをりをりも、また、かくながらふれば、すこしも思ひ慰めつべきをりもあるを、（「十八」）  
のように、「思ひ慰（む）」と一緒に使われていたり、

○あはれにあさましきはかなさのさま／＼につけて心ふかきなかに我ひとり物思しらねはいま、てなからふるにやそれもいつまで

と心ほそくおほす〔蜻蛉〕十八丁オウウ）  
新全集では、

あはれにあさましきはかなさのさまさまにつけて心深き中に、我一人、もの思ひ知らねば、今までながらふるにや、それもいつまで、と心細く思す。〔蜻蛉〕〔二六〕  
のように、姉妹の夭折に触発されての感慨である。

〔三八〕 中の君、出産近づく。

正月晦日方より、例ならぬさまになやみ給ふを、宮、まだ御覽じ知らぬことにて、いかならむと思し嘆きて、御修法など、所どころにてあまたせさせ給ふに、またまはじめ添へさせ給ふ。いといたうわづらひ給へば、後の宮よりも御とぶらひあり。かくて三年になりぬれど、一ところの御心ざしこそおろかならね、おほかたの世にはものしくももてなし聞こえ給はざりつるを、この折ぞ、いづこにもいづこにも聞こし召し驚きて、御とぶらひども聞こえ給ひける。

## 注

- 1 懐妊の徴候の現れたのは昨年五月ごろ。出産に近い。《新全集》昨年五月ごろ、とは、拙稿「源氏物語宿木前半評釈（2）」では、「一七」に当たる〔富山大学人文学部紀要〕第六六号（二〇一七年）。
- 2 集成は、「こうしてもう三年になったけれども。中の君が二条の院に移ってから三年と読める。この年（宿木の第三年）を、中の君が二条の院に移った早蕨の春の翌年とするのが現行年立の処理であるが、それでは二条の院移転から足掛け二年にしかならない。この第三年をもう一年あとにずらしてはじめて足掛け三年という計算になる。諸注、匂宮が宇治に通うようになった総角の秋以来足掛け三年と見るが、無理であろう。」と注する。世界は、「『集成』は「こうして三年になったけれども。中の君が二条の院に移ってから三年と読める。この年（宿木の第三年）を、中の君が二条の院に移った早蕨の春の翌年とするのが現行の年立の処理であるが、それでは二条の院移転から足掛け二年にしかならない。この第三年をもう一度あとにずらしてはじめて足掛け三年という計算になる。諸注、匂宮が宇治に通うようになった総角の秋以来足掛け三年と見るが、無理であろう。』〔成沢〕「小学館発行『完訳日本の古典』の略称」は「結婚以来、足かけ三年」と注す。」と、集成と集成と対立する説とを併記する。新全集は「中



の君との結婚以来、足かけ三年」、鑑賞と基礎知識後半も「女君は結婚以来三年になるが」と訳し、注釈も「三年になりぬ」は、匂宮と中の君が結婚して三年になったこと。」と注する。新全集、鑑賞と基礎知識後半、注釈に従いたい。

### 【鑑賞】

国語学者の時枝誠記氏は、『文章研究序説』（山田書院、一九六〇年）第二篇第一章二（四）に於いて、次のように述べている。

六君との新しい結婚生活に入るについて、匂宮は、中君を忘れ去つたのではなく、それどころか、大變な氣の使ひ方である。しかし、中君にはそれが通じなかつたのである。「略」久々で、中君の所に歸つて來た匂宮は、「略」中君を慰めるのである。もうこの頃、薫の邪心を知つて、その信頼出來ないことを悟つた中君は、次第に匂宮を頼りにするようになって來た。「略」匂宮は、六君との關係よりも、中君と靜かに暮すことの方が本望なのである。それがかなはぬことが残念であるが、そのやうにかしづき据ゑられてゐる中君を、世の人は幸人と評してゐる。

この段落でも匂宮は、「まだ御覽じ知らぬことにて、いかならむと思し嘆きて、御修法など、所どころにてあまたせさせ給ふに、またまたはじめ添へさせ給ふ」と心を碎いている。

〔三九〕 女二宮の裳着の準備。結婚近し。

中納言の君<sup>一</sup>は、宮の思し騒ぐに劣らず、いかに思はせむと嘆きて、心苦しうしろめたく思さるれど、限りある御とぶらひばかりこそあれ、あまりもえ参で給はで、忍びてぞ御祈禱などもせさせ給ひける。さるは、女二宮の御裳着、ただこの頃に成りて、世の中響き宮みののしる。よろづのこと、帝の御心ひとつなるやうに思し急げば、御後見なきしもぞ、なかなかめでたげに見える。女御のし置き給へることをはさるものにて、作物所<sup>三</sup>、さるべき受領どもなど、とりどりに仕うまつることどもいと限りなしや。やがて、そのほどに、参りそめ給ふべきやうにありければ、男方も心づかひし給ふ頃なれど、例のことなれば、そなたさまには心も入らで、この御事<sup>五</sup>のみいとほしく嘆かる。

## 注

- 1 底本は「中納のきみ」。「納」の下に「言」を補った。青表紙本系古代学協会蔵本も「中納言君」（九十二才九行目）。
- 2 どのようなお気持ちになってもらおうか、と嘆いて。
- 3 禁中の調度類を調進する所。藏人所の被管。《集成》
- 4 裳着の儀の直後、そのまま薫を婿として通わせようとする。《集成》
- 5 中の君のこと《集成》

## 【鑑賞】

集成解説三一〇頁（第一巻）に、「家集」Ⅱ『紫式部集』には母のことに一言も触れていないので、母は早く亡くなったと思われる。母の死を悼む歌も、母を恋う歌も一首もないところから、よほど小さい時に母と死別したのではなからうか」と記されているのはほぼ通説に成ったと思われる、また、『源氏物語』の主要登場人物の中に母を小さい時に亡くした者が多いことも良く知られている。

女二宮も、非常に幼い時に、とは言えないが、十四歳で母を亡くしている。しかし、そのせいで、父・今上帝が裳着の準備の際表に出るので、「めでたげに」お見えに成った、だから、かえって良かった、というのである。「なかなか」という副詞は、普通一般に悪いと考えられるときに良かった、という場合、或いは、普通一般に良いと考えられるときに悪かった、という場合に用いられ、ここは、前者である。

いったい、母が無い主要登場人物たちは、不幸に成っているだろうか。

男性では、夕霧が幸福、光源氏は他の人間が味わあないような不幸を舐めたが、人生全体を通して見ると、やはり勝ち組である。女性では、紫上がいる。玉鬘は、当初予定していた冷泉帝への入内は叶わなかったが、必ずしも不幸な人生とは言えないだろう。

〔四〇〕 薫、権大納言に昇進。

二月の朔日ついでごろに、直物なほしものとかいふことに、権大納言に成り給ひて、右大将かけ給ひつ。右の大殿おほいどの左ひだりにておはしけるが、辞し給

へるところなりけり。よろこび<sup>3</sup>に所どころ歩き給ひて、この宮<sup>4</sup>にも参り給へり。いと苦しくし給へば<sup>5</sup>、こなたにおはしますほどなりければ、やがて参り給へり。僧などさぶらひて便なき方と<sup>6</sup>おどろき給ひて、あざやかなる御直衣、御下襲など奉り、ひきつくり給ひて、下りて答の拝し給ふ、御さまもとりどりにいとめでたく、(薰)「やがて、衛府の禄賜ふ饗の所に<sup>7</sup>」と請じ奉り給ふを、なやみ給ふ人によりてぞ思したゆたひ給ふめる<sup>8</sup>。右大臣殿<sup>9</sup>のし給ひけるままに<sup>10</sup>、六条院にてなんありける。垣下<sup>11</sup>の親王たち、上達部、大饗に劣らず、あまり騒がしきまでなん集ひ給ひける。この宮も渡り給ひて、静心なければ<sup>12</sup>、まだ事果てぬに急ぎ帰り給ひぬるを、大殿の御方には<sup>13</sup>、「いとあかずめざまし」と宣ふ。劣るべくもあらぬ御ほどなるを、ただ今のおぼえのはなやかさに思しおごりて、おしたちもてなし給へるなめりかし。

## 注

- 1 除目(官吏任命の儀)の後、召名(任官名簿)の失錯を正す名目で行われる任命の儀。《集成》
- 2 右大臣、夕霧。以下、夕霧が兼任の左大将を辞し、右大将が左に転じたその空席という趣。《集成》
- 3 昇進のお礼言上に諸所を訪問する儀礼。《集成》
- 4 二条の院《集成》
- 5 「中君が」ひとくお具合が悪いので《集成》
- 6 「匂宮が」《集成》
- 7 右大将新任の披露の宴。【略】この時、親王、公卿も招待される。《集成》
- 8 お具合の悪い中の君のことが気がかりで「匂宮は」出席をおためらいになるようだ《集成》
- 9 底本は「左大臣殿」。直前に「右のおほいと」という文言があったので、「右大臣殿」と校訂する。
- 10 夕霧の右大臣新任の大饗が六条の院で行われたのにならって、という文言。ただしこの大饗のことは物語に見えない。《集成》
- 11 朝廷や貴族の邸宅で催される饗宴での、正客以外の相伴の人をさす。《鑑賞と基礎知識後半「垣下」》
- 12 気が気でないので。中の君の出産も間近なので、気もそぞろの体。《集成》
- 13 右大臣方では。六の君方のこと。匂宮がせっかく六条の院に顔を見せながら、同じ邸内の六の君を訪れず、二条の院に帰ったのを不満とする。《集成》

## 【鑑賞】

権大納言は、『源氏物語』前後編の男主人公四人のうち、臣籍降下しなかった匂宮を除く全員が獲得した役職である。その名も『浜松中納言物語』の主人公のように初めから中納言であった男ならそれでよいが、中将として初登場する『源氏物語』主人公の中納言時代（若しくは大将時代）はつらく苦しく、権大納言に就任してようやく理想性を取り戻し、安定するのである。

光源氏は、須磨一年間、明石一年半の滞在を得て還京した後、権大納言に成った。

薫は、流罪同然の身になった経験は無いが、目の前で大君が半ば自殺するような死に方で死んで行ったのは、勿論、人生最大の不幸である。女二宮降嫁はその悲しみから立ち直る時を意味し、それと相前後するにして、権大納言に就任したのは重い意味があるのである。（ほぼ同じような趣旨のことは、拙稿「宮廷社会の薫―宿木・蜻蛉の巻―」（『源氏物語講座』第四巻。勉誠社、一九九二年）に書いた）

### 〔四一〕 中の君、出産。

からうじて、その暁に、男にて生まれ給へるを、宮もいとかひありて嬉しく思したり。大将殿も、よろこびに添へて嬉しく思す。昨夜おはしましたりかしこまりに<sup>3</sup>、やがて、この御よろこびもうち添へて、立ちながら参り給へり。かく籠りおはしませば、参り給はぬ人なし。御産養、三日は、例の、ただ宮の御私事にて、五日の夜は、大将殿より屯食<sup>4</sup>五十具、碁手<sup>5</sup>の銭、椀飯<sup>6</sup>などは世の常のやうにて、子持の御前<sup>6</sup>の衝重<sup>7</sup>三十、児の御衣五襲<sup>8</sup>にて、御襖<sup>9</sup>などぞ、ことごとしからず忍びやかにし給へれど、こまかに見れば、わざと目馴れぬ心ばへなど見えける。宮<sup>10</sup>の御前にも浅香<sup>11</sup>の折敷、高坏<sup>12</sup>どもにて、粉熟<sup>13</sup>参らせ給へり。女房の御前には、衝重をばさるものにて、檜破子<sup>14</sup>三十、さまざまし尽くしたることどもあり。人目にことごとしは、ことさらにしなし給はず。七日の夜は、后の宮の御産養なれば、参り給ふ人々と多かり。宮の大夫<sup>14</sup>はじめて、殿上人、上達部数知らず参り給へり。内裏にも聞こし召して、（帝）「宮のはじめて大人び給ふなるに、いかでか」と宣はせて、御佩刀<sup>15</sup>奉らせ給へり。九日も、大殿より仕うまつらせ給へり<sup>16</sup>。よろしからず思すあたりなれど、宮の思さむところあれば、御子の君達<sup>17</sup>など参り給ひて。すべていと思ふことなげにめでたければ、御みづからも<sup>17</sup>、月ごろ、もの思はしく心地のなやましきにつけても、心細く思したりつる<sup>18</sup>に、かく面だ

たくし今めかしきことどもの多かれば、すこし慰みもやし給ふらむ。大将殿は、かくさへおとなび給ふれば、いと我が方さまはけ  
 遠くやならむ、また、宮の御心ざしもいとおろかならじ、と思ふは口惜しけれど、また、はじめよりの心おきてを思ふにはいと嬉しく  
 もあり。

注

- 1 昇進の喜びに中の君安産の喜びが重なる。《新全集》
- 2 底本は「かしまり」「し」の下に「こ」を補う。青表紙本系古代学協会蔵本も「かしまり」（九十四丁ウ三行目）。
- 3 匂宮が昨夜の饗応に加わってくれたお礼。《新全集》
- 4 強飯を卵型に握り固めたもの。《集成》
- 5 碁や双六の勝負に賭けるための銭。《新全集》
- 6 中の君。《新全集》
- 7 檜の白木で作った四角の折敷に台をつけたもの。食器をのせる。《新全集》
- 8 小児用の掛布団。《新全集》
- 9 『源氏物語』では、このように目立たぬ趣向が賞讃されることがよくある。例えば、  
 七そうのほうふくなどすへておほかたの事ともはみなむらさきのうへせさせたまへりあやのよそひにてけさのぬひまてみしる人は世になへて  
 なからすとめてけりとやむかしうこまかなること、もかな（「鈴虫」四丁オ）  
 新全集では、  
 七僧の法服など、すべておほかたのことどもは、みな紫の上せさせたまへり。綾の装ひにて、袈裟の縫目まで、見知る人は世になべてならずと  
 めでけりとや、むつかしうこまかなることどもかな（二二三）  
 とある。
- 10 匂宮《集成》
- 11 香木の一種。《新全集》
- 12 食物を盛るのに用いる高い脚をつけた器。《新全集》
- 13 菓子の名。米・麦・豆・胡麻などの粉を餅にしてゆで、甘葛とこね合せて、竹筒にかたくおし入れて固めたもの。《新全集》
- 14 中宮職（中宮つきの役所）の長官。《集成》

- 15 守り刀。《新全集》
- 16 九日の産養は夕霧右大臣の主催。六の君を正妻とする匂宮にとって、夕霧は後見役。《新全集》
- 17 中の君（自身も）《集成》
- 18 「心細く」思ったのが、過去のこととして語られている。「三八」鑑賞欄参照。

### 【鑑賞】

『紫式部日記』前半の主要テーマとも言うべき、寛弘五年（二〇〇八）九月の中宮影子の出産（後の第六十八代後一条天皇）について、産養の様子が詳述されている。

「佩刀」は、頭の中將頼定（よりきた）が持参している。（二一五）

「三日にならせたまふ夜」とは、九月十三日であるが（御誕生は、九月十一日）、「宮つかさ、大夫（だふ）よりはじめて、御産養（おんたうやしのつか）仕うまつる。」と記されている。（二一七）

「五日の夜は、」藤原道長の御産養である。（二一八）

「七日の夜は、」朝廷の御産養である。（二二〇）

右記の『紫式部日記』の記事は、鑑賞と基礎知識後半の「産養の儀礼」でも触れられている。なお、「産養の儀礼」では、若菜上巻の明石の姫君の男児出産の記事、柏木巻の女三宮の薫出産の記事が挙げられ、詳細な比較検討がなされている。

この段落で最も注目すべき産養は、夕霧主催のものではなからうか。六の君のライバル・中の君であっても、男児出産をしたことで、夕霧も一目置かざるを得なくなったことであろう。

〔二〇一八年九月一九日提出〕

